
長崎ちゃんぽん

金地院 憂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長崎ちゃんぽん

【コード】

N3839P

【作者名】

金地院 憂

【あらすじ】

大好きだった彼女。

彼女が主人公に残したものは…

恵の三回忌の帰りに、落葉の残る並木通りを、寒さを踏み締めるように一歩ずつ歩く。

コートの際を大袈裟に引き寄せ、白い息を吐き出す。

この三年間、僕はただ生きてきた。

来る日も来る日も、もう会う事の出来ない彼女を思い続けていた。

移り行く四季それぞれが見せる表情に目を向ける事なく、モノクロの世界を生き続けた。

あの日から、時計の針は止まったままだ。

中学生の時、僕は長崎に引っ越してきた。

父親の転勤で、住み慣れた大都会から出て来たのだった。

サッカー部に入った事もあって、僕はすぐに新しい学校に打ち解けた。

ある日、僕は練習の後に薄暗い校内へ忘れ物を取りに行った。

その時たまたま通り掛かった美術室に、まだ電気が点いていた。

好奇心から中を覗くと、一人の女子生徒が絵を描いていた。

その綺麗な横顔に、僕は時間を忘れて見とれていた。

それが恵との出会いだった。

忘れ物を取りに行ったのに恋心を落としてきた僕は、周りの友人の冷やかしの似た後押しに助けられ、恵との距離を縮めていった。

勉強を犠牲にした努力の甲斐もあって、卒業式の日から僕たちは付き合い始めた。

地元の公立高校に大勢の級友たちと進学した僕とは対称的に、恵は美術の専門学校へ通う事になった。

お互いに環境が変わっても、日曜日には必ずデートをしていた。

と言っても、学生の財力で出来る事は限られており、いつも学区内の公園で絵を描く恵の側に僕が寄り添って、他愛ない会話をしていた。

その帰り道に夕食を食べに行くのだが、必ず恵は割り勘を要求した。

しかしリンガーハットに行った時だけ、僕は奢る事を許された。

当時二人で1000円しなかったちゃんぽんに通い詰めた僕たちは、いつしか店長とも仲良くなっていた。

お酢を入れる入れないでいつも口論していた僕たちを見て、店長はいつも豪快に笑っていた。

「いつか恵ちゃんが立派な画家になったら、この店に飾る絵を描いてくれよ！」

それがマスターと親しまれた店長の口癖だった。

そんなある日、恵が体調を崩して入院した。

大した事はないから大丈夫、という恵からのメールで安心していた僕に、恵の母親から電話が掛かってきた。

「今日の夕方に、恵の検査結果が出たの。それでね……」

お母さんの言葉が詰まる。

「恵がどうかしたんですか。教えて下さい！」

受話器を握る手に力が入る。

「あの子の……」

恵の頭に腫瘍が見つかったの。

大きくなり過ぎて、手術では治せないって。

あなたには知らせないで、って恵には言われてたんだけど。」

集中治療室に入った恵に面会することは許されなかった。

それから2ヶ月後、再び恵の母親から電話が掛かってきた。

恵の訃報だった。

実感がなかった。

僕の知らない世界で、僕の知らない恵が死んだ。

そう思っていた。

市街地に入ると、昼食を取っていない事に気付いた。

ふと足を止めたのは、恵と足しげく通ったリンガーハットだった。

三年振りの店内に入ると、僕を見つけたマスターが駆け寄ってきた。

「おお！

久しぶりだなあ。

今は何してんだい？」

「専門学校に行かせてもらってます。

介護士を目指してます。」

コートを脱ぎながら僕が答えた。

「そおなのか〜！」

俺っちの方は、何にも変わらないぞ。」

「…そうですねえ。」

髪の毛の無くなったマスターの頭を見ながら、僕はカウンターに着いた。

ふと、壁に描けられた油絵が目に入った。

僕にはすぐに分かった。

「恵の…絵だろ…？」

注文もしていないちゃんぽんを運んできたマスターが、今まで聞いたことがない優しい声で言った。

「この絵な…」

恵ちゃんが亡くなった日に、お母さんが持って来てくれたんだよ。

ちゃんと約束覚えていてくれたんだな。」

最後の方は涙で聞こえなかった。

優しい色使いで描かれた公園には、生き生きとした木々が並んでいる。

いつも二人で見た風景だった。

桜が開いた春、蝉がうるさい夏、日の陰りが早くなった秋、雪が積もっていた冬。

恵が輝きをくれた世界を思い出しながら、僕は目頭が熱くなるのを感じた。

そしてマスターが運んできたちゃんぽんに、勢いよくお酢をかけた。

「恵ちゃんが薦めても入れなかったのに、今日は初雪でも降るか？」

マスターが目を拭いながら笑った。

その日のちゃんぽんは、昔よりも酸っぱかった。

でも、お酢を入れたのだけが原因じゃなかったと思う。

それから半年後、僕は介護福祉士になった。

出勤初日に、先輩から飲み会に誘われた。

「今日はお前の歓迎会だ！

女の子たくさん呼んでやるよ。

どんな子がタイプなんだ？」

僕はいたって真面目に答えた。

「ん、ちゃんぽんにお酢を入れる子ですかね。」

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3839p/>

長崎ちゃんぽん

2010年12月10日11時30分発行